

父母と恩師へ

「歴史という光は無情である。それは、不思議で崇高なところがあって、光でありながら、そして、まさしく光であるがゆえに、しばしば、人が光輝を見るところに陰を投影する。それは同じ人間から、2つの違った幻影を作り出す」

— ヴィクトル・ユゴー 『レ・ミゼラブル』

## はじめに

日本には、歴代アメリカ大統領に関する概説書はあっても研究上、もしくは一般の深い関心に耐え得るような詳説書はまだ存在しない。もちろん本場のアメリカでは『The Complete Book of U.S. Presidents』『The Book of Presidents』『Guide to Presidency』『Presidents Fact Book』『Facts about the Presidents』『Encyclopedia of the American Presidency』など歴代アメリカ大統領を解説した本が少なくない。

ところで中国史を学ぶ際に有名な書として『十八史略』が知られている。もちろん『十八史略』の内容の是非についてはさまざまな論があるものの、十八史を通読することは非常に骨が折れるので、それを容易に一覧できる形式にまとめた曾先之の功績に後世の我々は益するところが大きい。歴代アメリカ大統領についても同じことが言える。歴代アメリカ大統領に関する伝記研究は、大統領による差はあるものの、まさに汗牛充棟して余りある。また歴代大統領関連の一次史料の総量たるや天文学的な量と言っても過言ではない。それらを通読することは非常に多大な労力を要するし、筆者の経験からすれば莫大な費用がかかることは間違いない。本書の意義は、大統領について何かを調べたり研究したりしたいと考える読者がそうした労力を節減できるように、多くの手掛かりを与えることにある。そのためより深い関心にも耐えられるように、本文に加えて巻末史料を付している。

本書を執筆するにあたって上述の書籍の他にも非常に多くの先行研究を参考にしてはいるが、それだけにとどまらず、一次史料に基づいて独自の調査や綿密な裏付けを取るように心がけた。中でも『The Complete Book of U.S. Presidents』は、立項の際に非常に参考となった。しかし、内容の質と量ともに、アメリカで発行された書籍も含めて、これまでにない水準に達するように鋭意努めた。本書は大統領の政権のみならず、その経歴や政治哲学、血縁者など仔細にわたって論じている。もちろん従来の研究を参考しているが、それで足りない場合は筆者独自の研究による記述も含まれている。研究者にとってさまざまな研究の足がかりとなるように努めただけではなく、一般にも分かりやすい記述をするように配慮した。それゆえ、しばしば歴史の記述で陥りがちな固有名詞の羅列を避けるために、固有名詞の使用は説明内容に関連性が高いものに限り、できるだけ一般的な説明を採用するように努めた。

本巻は建国期の大統領、すなわち第4代ジェームズ・マディソンを取り上げてい

るが、建国初期の大統領は現代の大統領に匹敵するほど重要な意味を持っている。リチャード・V・ピラードとロバート・D・リンダーは『アメリカの市民宗教と大統領』の中で以下のように述べている。

「建国以来、大統領制はアメリカ国民にとって極めて重要な存在だった。共和国の初期の頃は、ジョージ・ワシントン、ジョン・アダムズ、トマス・ジェファソン、アンドリュー・ジャクソン、ジェイムズ・ボーク、そしてエイブラハム・リンカーンのような著名な人々がこの制度に対して彼ら自身の威信をつけ加えた」（堀内一史・犬飼孝夫・日影尚之訳）

このように現代大統領制を考察するにあたって18世紀から19世紀の大統領について検討を加えなければならない。すなわちそれは大統領制発展の歴史だからである。

2016年6月

西川秀和

## 本書について (凡例をかねて)

### A 構成

この事典は、第4代大統領ジェームズ・マディソンの生涯と業績を論じ、さらに関連諸資料を加えて、大統領という人間をさらに深く知る目的で編まれた。論述の主眼は、各人が大統領となり、大統領職を遂行する過程に、生まれから成長するまでに獲得した経験が、いかに反映し影響しているかを読み取ろうとするところにある。

### B 内容

本論は次の項目内容からなる。

0. 扉：歴代、所属党、在任期間などの基本事項に、顔写真、代表的な発言（英和）、および略年譜（年齢付き）を配し、大統領の全体像を一目で把握できるようにした。
1. 概要：生涯、業績を簡略に解説し導入部とする。
2. 出身州／生い立ち：生まれ育った土地柄および家系について説明する。
3. 家庭環境：親、兄弟姉妹について述べ、主に幼少期を明らかにする。
4. 学生時代：学業、学内外での諸活動など、青少年期の人間形成について述べる。
5. 職業経験：アメリカ人としての実社会での経験、政治に関わるようになり、大統領選挙に立つまでのことを論じる。
6. 大統領選挙戦：選挙運動、大衆・マスコミの反応、選挙戦術、対立候補、そして選挙結果について述べる。
7. 政権の特色と課題：内政・外交全般にわたり、いくつかの主要なテーマに分類し、大統領が主導した諸政策とその経過・結果を、社会・時代背景を交えながら詳述する。
8. 副大統領／閣僚／最高裁長官：政権を支えた副大統領と閣僚、そして最高裁長官について略述する。
9. 引退後の活動／後世の評価：大統領職を辞してからの活動、時代が経過してからの業績に対する評価について述べる。
10. ファースト・レディ／子ども：大統領夫人・ファースト・レディについては、大統領との個人的関係にとどまらず社会的活動に広く関わる場合が多いので、特別に立項した。ちなみに「ファースト・レディ」という呼称が大統領夫人を示す語として初めて使用された例は1877年3月5日の『インディ

ペンデント紙 Independent』である。

11. 趣味／エピソード／宗教：前項とあわせ、大統領の私的な側面を浮き彫りにする情報をまとめた。
12. 演説：大統領が自らの政治理念・思想を表明している代表的演説を収録した。英語原文に日本語訳を添え、冒頭に解説を付した。出典は、『A Compilation of the Messages and Papers of the Presidents』と『Presidential Messages and State Papers』である。
13. 日本との関係：大統領が日本に与えた影響や日本人がどのように大統領を評価したのかについて述べる。なお引用した文献中の旧字体は読みやすいように筆者が新字体に改めた。
14. 参考文献：大統領自身による著作を最初に掲げ、続いて史料集成、最後に主要な基礎文献を並べた（さらに詳細な内容を知りたい読者のために特に重要なものか、もしくは入手が容易な近年発行のものに限った）。英語文献は ABC 順（筆者名）で並べ、邦語文献は五十音順（筆者名）で末尾に並べた。邦語がある場合は、原語が英語の場合でも邦語文献に含めた。なお復刻版の発行年次をそのまま表記している場合もある。なお「参考文献」はあくまで読者に参考となる文献を列挙しているのみであり、筆者が参考にした書籍は「参考文献」として挙げた書籍以外にも多く含まれることを明記しておく。

### C 巻末史料

巻末史料として本文中では紹介しきれない一次史料を掲載した。本文中に（巻末史料 1<sup>4</sup>）というように表記し、対応させるように配慮した。文中の [ ] は筆者による訳注であり、( ) は史料の書き手による原注である。

### D 総合年表

- ① 各大統領を中心としてアメリカ史の主な出来事をまとめた。
- ② ジェームズ・マディソンの生誕からその死去までを採録した。
- ③ 月のみ判明する事項は該当月の項目の末尾に配列した。また、年のみ判明するものはその年の最後に一括した。

### E 表記について

- ① 本文内容を要約する小見出しを適宜付した。
- ② 地名、人名、団体、組織名、法規類、頻出キーワードなどに英語を並記した。英

語は文中の相当箇所へ挿入した。なお、人名については判明するかぎり生没年月日を付記した。事項に含まれる年月日については史料の差異によって若干異なる場合があるが、信頼できる史料に基づき比較考量したうえで記載している。

- ③ 1776年7月2日以前は「植民地」、それから1788年7月2日までの間は「邦」、それ以後は「州」と表記する。また1781年3月1日以前は「大陸会議」、それから1788年7月2日までの間は「連合会議」、それ以後は「(連邦/アメリカ)議会」と表記する。
- ④ 政党の名称については、ジェファソン政権以前は民主共和派、連邦派の呼称を使用し、ジェファソン政権以降は民主共和党、連邦党の呼称を用いる。また本来、「民主 Democratic」という呼称は、衆愚政治の意味を含んでいたため蔑称であり、単に共和派/党と呼ぶ方が正確であるが、後の共和党と混同を避けるために民主共和派/党という呼称を採用した。
- ⑤ 「大使 ambassador」という呼称は君主制を想起させるため、アメリカではそれに代わって「公使 minister」という表現が使われていた。したがって本書でも「公使」という表記を採用している。またその他の官職名についてはできるだけ意識に努めた。例えばカーネル (Colonel) という名誉称号についても、カーネルという表現が馴染みがないために、判明する限り、「民兵 (名誉) 大佐」などと訳出している。
- ⑥ 「ホワイト・ハウス」や「ファースト・レディ」といった呼称は初期には使われていなかったが、本書では便宜上、それらの呼称を用いている場合がある。
- ⑦ 随所で引用されるアメリカ合衆国憲法の訳文はすべて『アメリカの歴史』(西川正身監訳)に基づく。
- ⑧ ヤード・ポンド法は次のようにメートル・グラム法に換算する。

1パイント＝約0.47リットル、1ガロン＝約3.8リットル、1ブッシェル＝約35.2リットル、1ホッグズヘッド＝約238.5リットル、1オンス＝約28グラム、1ポンド＝約454グラム、1インチ＝約2.5センチメートル、1フィート＝約30.5センチメートル、1ヤード＝約0.91メートル、1マイル＝約1.6キロメートル、1エーカー＝約0.4ヘクタール。

## F その他

- ① 本書全体の表記を含めた統一および調整は、筆者と編集部が行った。
- ② 史料については、収集から構成全般にわたり、筆者が主となって作成した。それゆえ、すべての責任は筆者に帰する。

## ■ジェームズ・マディソンの時代

年	年齢	月日	できごと
1751		3.16	ヴァージニア植民地ポート・コンウェイで誕生。
1755	4	4.19	フレンチ・アンド・インディアン戦争勃発。
1769	18	9	カレッジ・オブ・ニュー・ジャージーに入学。
1771	20	9.25	カレッジ・オブ・ニュー・ジャージーを卒業。
1775	24	4.19	レキシントン＝コンコードの戦い、独立戦争始まる。
1776	25	5. 6	ヴァージニア革命協議会に参加。
		7. 4	独立宣言公布。
		10. 7	ヴァージニア邦議会議員として初登院。
1777	26	11.15	行政評議会の1人に選出される。
1779	28	12.14	大陸会議のヴァージニア代表に選出される。
1787	36	5.25	憲法制定会議に出席、主導的な役割を果たす。
1788	37	6. 2	ヴァージニア邦合衆国憲法批准会議に参加。
		6.21	合衆国憲法発効。
1789	37	2. 2	連邦下院議員に当選。
		7.14	フランス革命勃発。
1794	43	9.15	ドロシア・ベイン・トッドと結婚。
1798	47		ヴァージニア決議を起草。
1801	49	2.27	父と死別。
		3. 5	国務長官に指名される。
1806	55		「イギリス外交政策の検証」を執筆。
1809	57	3. 4	大統領就任。
1812	61	6. 1	戦争教書を議会に送付。
		6.19	1812年戦争勃発
		12. 2	大統領再選。
1814	63	8.24	英軍のワシントン焼き討ちを避けてヴァージニアに逃れる。
		12.24	ガン条約締結、1812年戦争終結。
1817	65	3. 4	大統領退任。
1821	70		「憲法制定会議に関する覚書」の執筆を始める。
1824	73		ラファイエットの表敬訪問を受ける。
1826	75		ヴァージニア大学理事職をジェファソンから引き継ぐ。
1829	77	2.11	母と死別。
			ヴァージニア州憲法修正会議に参加。
1836	85	6.28	死去。

アメリカ歴代大統領大全  
第1シリーズ 建国期のアメリカ大統領 第4巻  
ジェームズ・マディソン伝記事典

---

目 次

はじめに	i
本書について	iii
1. 概要	2
棒石齋の半分	2
〈憲法の父〉	2
2. 出身州／生い立ち	3
ヴァージニア王朝	3
農園主の家系	4
3. 家庭環境	5
オレンジ郡	5
父母	6
兄弟姉妹	6
4. 学生時代	8
寄宿学校	8
カレッジ・オブ・ニュー・ジャージー	8
5. 職業経験	11
修養期間	11
郡治安委員	13
ヴァージニア革命協議会	13
行政評議会	14
大陸会議	15
連合会議	19
ヴァージニア邦議員	26
連合会議	32
憲法制定会議	36
ザ・フェデラリスト	54
ヴァージニア憲法批准会議	57
連邦下院議員	63
退隠生活	81
国務長官	85

6. 大統領選挙戦 .....	98
1808年の大統領選挙	98
1812年の大統領選挙	100
7. 政権の特色と課題 .....	102
主要年表第1期	102
主要年表第2期	103
連邦議国会期	104
政治的影響力の低迷	105
大統領官邸の整備	106
禁輸措置の改廃	106
フロリダ問題	108
1812年戦争	111
ハートフォード会議	130
バーバリ国家対策	131
第二合衆国銀行設立	132
国内開発事業	132
ネイティブ・アメリカン政策	133
その他の外交	135
その他の内政	135
8. 副大統領／閣僚／最高裁長官 .....	137
副大統領	137
国務長官	139
財務長官	139
陸軍長官	143
司法長官	147
郵政長官	149
海軍長官	150
最高裁長官	153
9. 引退後の活動／後世の評価 .....	154
9.1 引退後の活動 .....	154
日常生活	154
アルプマール農業協会会長	155

	ラファイエットとの再会	155
	ヴァージニア大学の運営を引き継ぐ	156
	強い政治的影響	157
	ヴァージニア州憲法修正会議	163
	アメリカ植民協会名誉会長	164
	困窮した最晩年	165
<b>9. 2</b>	<b>後世の評価</b>	<b>167</b>
	圧倒的な評価	167
	否定的評価	168
	後世の大統領による言及	169
	総評	169
	ランキング	170
<b>10.</b>	<b>ファースト・レディ／子ども</b>	<b>172</b>
<b>10. 1</b>	<b>ファースト・レディ</b>	<b>172</b>
	クェーカー教徒の伝統	172
<b>10. 2</b>	<b>子ども</b>	<b>180</b>
	継子	180
<b>11.</b>	<b>趣味／エピソード／宗教</b>	<b>181</b>
<b>11. 1</b>	<b>趣味</b>	<b>181</b>
	ペット	181
	抜粋ノート	181
	科学的関心	183
<b>11. 2</b>	<b>エピソード</b>	<b>183</b>
	機転	183
	死馬を売る	184
	盗まれた自分の帽子を買う	184
	マディソンの暗号	184
	ネイティヴ・アメリカン観	185
	奴隷制観	185
	世界政府の構想	188
	合衆国の将来の人口を予測	188
	帽子の謝礼	188

ロバート・オーエン評	189
ジェームズ・マディソン記念堂	190
栄誉	191
11. 3 宗教	192
12. 演説	193
13. 日本との関係	197
初期の言及	197
福澤諭吉による言及	197
14. 参考文献	198
卷末史料	200
総合年表	299